SANTIAGO DE COMPOSTELA

in the saddle は「旅にでる、馬に乗って」の意。芭蕉流に言えば「旅を栖（すみか）とす」だ。今年も出かけることにした。

近頃は危険を避ける、冒険を避ける、険しい地形を避ける、新奇な自然に近寄らない、など軟弱化。

旅に出る時はいつも、不測の事態が待ち受けているかも知れないと言う不安を感じている。外的要因だけではなく、内的要因（物忘れ、注意力散漫、敏捷性・視力・動体視力・脚力減衰など）も気になってきた。

食糧不足時代に育った年代の者は美味しい物を後に残して次の楽しみにする。若い世代の者は美味しい物から食べる。吾輩もそれに倣って、行きたい所から行くことにした。行きたくても脚力が落ちて行けなくなる虞を感じてきたから。

ラテン語圏の国々は人が明るいことと、食べ物が旨いことが気に入っている。今年は多少の無理を押してスペインとポルトガルを走り、サンティァゴ・デ・コンポステラを目指すことにした。

ポルトガルとスペインは魅力的な街が沢山あり、それだけに道が錯綜していて、その上山坂が多い。コース作りに難渋した。ローカルのフライトスケジュールにも悩まされた。

一日の旅を無事終えて、宿を決め、そこに荷物を置いて身軽な姿で街中を流す黄昏時は、自転車旅行の中でも静かな満ち足りた濃密なひと時だ。

スペイン巡礼は El　Camino(エル・カミーノ)と言われ、スペイン北西部にあるサンティァゴ・デ・コンポステラを各地から目指す。そこはエルサレム、ローマと並ぶ世界三大聖地の一つ。サンティァゴとは聖ヤコブのスペイン語名（フランス語でサン・ジャック、英語でセイント・ジェームズ)。カミーノは道。定冠詞の EL が付くとサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼路という意味になる。因みにブエン・カミーノ(ブエンは good の意)は「良い旅を！」とか「気を付けて！」とか「頑張って！」なんて意味になる。

アラゴン・ルート、フランス・ルート、海岸ルート、東方ルート、イギリス・ルート、ポルトガル・ルートがあり、いずれもかなり険しい。今回はポルトガル・ルートを辿る事にした。

巡礼者は巡礼オフィスでクレデンシャルと言う巡礼手帳を貰いバル、宿、教会、レストランなどでスタンプを押してもらい、徒歩と馬では１００km以上、自転車なら２００ｋｍ以上走ってサンチャゴに着いたとき巡礼終了証明書をもらえる。巡礼者は目印として帆立貝を身につけ、この手帳を持つことで巡礼宿（アルベルゲ）に泊まれる。極く低料金、若しくは志程度（いくらでも良いが３～５€が相場）であるが、蚤虱にやられることが多いらしい。

但し１泊だけ可。しかもシーツや枕カバーが無いので昔のユースホステルのように持参しなければならない。今回は使わないことにした。映画「星の旅人たち」の中でよく出てくる。

サンティァゴ・デ・コンポステラは都(マドリッド)の西北の杜にあり、聳ゆる甍はキリスト教徒の心の故郷。吾輩は異教徒ながら沐浴斎戒、手を洗い口を漱ぎお参りをしよう。

旅をして困ることの一つは jet rag だ。地球は 24h で一周するから、３６０°÷２４h=１５°、１時間で地球経度 15 度を回ることになる。日本からヨーロッパへと西へ行けば遅れの時差となり、ヨーロッパから日本へと東に行けば現地より進んだ時差となる。遅れ時差は 24 時+8 時間＝32 時間、進み時差は 24 時－8 時間=16 時間。1 日を 32 時間かけて通過するのと、16 時間で通過するのとでは圧倒的に後者が辛く感じるのは当然。米国での試合に日本勢が不成績なのは頷ける。jet rag の解消には、西へ移動する場合は時差の 1/2 の日数、例えば８時間の時差なら４日を要し、東へ移動する場合にはその 1.5 倍（４＊1.5＝６）の 6 日を要する、と一般的に言われている。サイクリングとかゴルフのように終日太陽に当たっていると体内時計が対応して早く解消できる。

困ること：食事の量（多すぎるので少量のオーダーの仕方を国別に会得しておく）、トイレが少ないこと（デパートにもない、バルで用を足す）、日曜日（どこも休みで前日に水や食料を確保しておかねばならない。小さな街のホテルは個人営業なので、泊まれないことが多い。）。

カフェやバルの効用

「小人閑居して不善を為す」とか言われたりしたこともあって、日本で 1 日どころか数時間でも何もしないでいるのは容易なことではない。１時間ほど暇が出来て昼寝でもしようとするとその場所がない。喫茶店の椅子は硬くて昼寝には適さない。映画館に入ればつい映画を見てしまうし、騒がしくて昼寝どころではない。尤も５０年程前には渋谷にニュース専門の映画館があって安くて(１０円)快適だった。すべての場所が何かをするためだけにあって、ぼんやりしては居られない。公園などは良いのだが、それも天候次第だ。そのうち腹が減ってくれば食べ物屋を探さなければならないし、食事が終わればその次に行く場所を探さなければならない。安心して何もしないで居られるところは日本にはない。日本ではする事の一つ一つを違った場所ですることになっている。街を歩けば聞きたくもない騒音に悩まされるし、見たくもない映像に煩わされる。フランスならカフェ、他のヨーロッパ諸国ではバルとかバールに行きコーヒー１杯で１日中居られ、文句一つ言われない。カフェやバルでは何もしなくても良いし、何をやっても良い。朝 6 時から夜中の１２時までが一般的な営業時間。

コース概要;マドリッドから南下してアランフエスを経てプエルトリャノから西進、コルドバ、セヴィリアを経て更に西進してラゴスに至り、そこから北上してリスボンを経てサンティアゴ・デ・コンポステラを目指す。Uの字の書き順を逆にした形。

今回の旅の楽しみ、狙い

○１．アランフエスでホアキン・ロドリーゴ作曲アランフェス・ギター協奏曲（禁じられた

遊び「民謡愛のロマンスと二つのメヌエット」で有名なナルシソ・イェペスのデビュー曲）の雰囲気に浸ること。

○２．前に見逃した（月曜日でお休み）セビリア近郊のイタリカ（イベリア半島最大のローマ遺跡）を見ること

×３．大学都市コインブラでファドを聞くこと。

○４．ポルトガル各地でアズレージョ（青を基調とした絵タイル）とターリャ・ドゥラーダ（金泥細工）を見ること。

○５．本場のポートワインや各種のワインを楽しむこと。

○６．ア・コルーニャのヘラクレスの塔（ローマ時代に建てられた現存する最古の塔、築 2,000 年。今でも現役の唯一の灯台）を見ること。

○７．サンチアゴ・デ・コンポステラで巡礼終了証明書をゲットする事。

コース

第１日目　５月 22 日やられた！　9：45 ルフト・ハンザ航空で成田発、フランクフルト乗り換え、18：30 マドリッド着。ルフトハンザ手荷物規則；15~32kg で縦横厚みの合計が 1.41~2m の自転車は片道 70 ユーロ、それ以下は無料。

マドリッドの地下鉄車内でインナーポシェットを切り取られた。カード類の再発行には時間がかかるので、ウェスターン・ユニオンを使って送金してもらうことにした。

第２日目　５月 23 日警察に被害届け。序でに市内散歩、靴磨きや、扇子などのフラメンコの小道具屋が目立った。

第３日目　５月 24 日行動開始！あの植物園のようなアトーチャ駅からアランフエスまで輪行。２日目から走り出すのが常であったが、今回は３日目から。行程を取り戻すべく輪行を多用すべき。アランフエスは道幅広く緑多い静かな感じの良い街。造成中の土地を暫く歩き、オカニャーと言う街でホテルを訪ねると満室とのこと。小鳥のさえずりしか聞こえない街にしてはおかしなこと。２星のオスタルに投宿、広くて清潔、バス・トイレ付き，ツイン、２６€。

アランフエス

夕食に定食(メニューと言う、日本語のメニューはカルタと言われる。)を注文したら、定食は夜だけ、夜は９時から、との事。

スペインの大地

風車

マドリデホス

テンブレケ　　ドンキホーテが出迎えるストラン

第４日目　５月 25 日ドンキホーテ　冷・強風の中、８時スタート、久し振りに１０７ｋｍ走った。テンブレケは静で豊かな感じの街、ユニークな古い建物を大切にしている。プエルト・ラ・ピーチェはドンキホーテ一色の街、日本人ツアーに会った。女性サイクリスト達も店の男も街の入口にあったホテルはお薦めでは無いらしい。

プエルト・ラ・ピーチェはドンキホーテ一色、地元サイクリストと情報交換

ヴィラルタ・デ・サン・フアンの２星オスタル、バス・トイレ共用１５€、バル兼業。

第５日目　５月 26 日　イベリコ豚の生ハム

強い向い風の中を７０ｋｍ走った。コルドバをパスしてシウダ・レアルから列車に乗ろうとしたが、適当な列車がなかった。スペインでは列車テロ以来ローカル列車以外は自転車をそのまま持ち込むことは禁止されている。ダイナミックな土地利用が続く。オリーヴ畑、ブドウ畑、向日葵畑、牧草地がそれぞれ暫く続く。３６０度地平線と言う所もあった。北海道富良野あたりは箱庭的、北海道以外は家庭菜園的な土地利用だと思った。

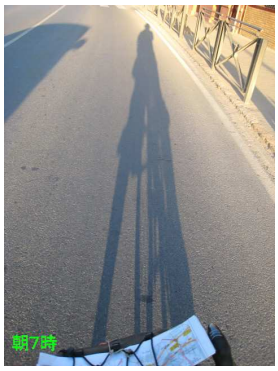
アマポーラ

カルモナからセヴィリアへ列車を利用。セヴィリアは大都会。古きも新しきもあって、活気に溢れている。見所が多い。既に２度来ているのでこの街の魔力に取り付かれる前に脱出しよう。ガイドブックにはツインで５３€～で雰囲気の良いクラシックなホテルがあると言うので、駅から道を良く知らないタクシーでホテルのそばまで行った。道が細くて横付けできない。９３€！２星だけあってエレベーターもなければ階段や廊下が狭くて、大荷物

は難渋。パブで夕食。イベリコ豚の生ハム５枚、２．５€。少しも塩辛くなく、肉色は濃く、脂身は純白。これほどの物は初めて。

第６日目　５月27日 tinto de verano con limon(レモン入り夏の赤ワイン)にすっかり嵌ってしまった。イタリカへの道が分からない。カテドラルの場所だけは教えてもらって、後は磁石と感を頼りに東と北に進路を取る。今日は日曜日なのでサイクリストが多い。何度か彼らに聞いたり先導してもらって１４ｋｍを２時間２０分でたどり着いた。帰りは８ｋｍ３０分。道路も景観もすっかり変わってしまい、辺境の地と言う感じから一大観光地に変貌している。途中一箇所だけ変わらない所があって、懐かしかった。セヴィリアの街中ジャカランダが花盛り。

第７日目　ポルトガル入国　５月 28 日６時半に早立ち、７時１０分朝焼け。９ｋｍ先のミエブラで忽然と古城。ここで朝食、生ハム旨し。更に西進、強い向い風も収まり、サドルと尻の馴染みも良くなり、快調。ストレスから来たらしい口内炎も大分良くなった。パルマ着、この街はポルトガルに似てタイル装飾を施した建物が多い。鉄格子の嵌った出窓はこの地方の特徴。大海原のようなオディエル河を長大橋で渡る。むせ返る様なエニシダ、色も形も様々な路傍の花々。アヤモンテ、スペインはここまで、渡河すればポルトガルのヴィラ・レアル。　アヤモンテは国境の町という感じは全くなく、海洋リゾートタウンだ。フェリー乗り場を尋ねたが誰も知らない。スペイン人は車で橋を渡るし、極めて小さな渡し場なので故無しとしない。スイス人サイクリストに出会う、フル装備。スペイン・ポルトガル・ピレネーを走るとか。吾輩の車に大いに関心、感心。



２００６年にポルトガルからスペインに入ったときは商業広告の数、店舗数、車の数、百貨店など大型店舗など両国間で大きな落差を感じたが、今回は大した差は感じなかった。ＥＵ圏内均質化現象か？フェリーはポルトガルからスペインに買物に来る人でにぎわっていた。乗客の半数以上が自転車を持ち込んでいた。渡航時間１０分、１６時３０分発、１５時４０分着(時差１時間あり。)

第８日目　５月 29 日西進、ポルトガルを走る　ラゴア泊。ポルトガルに入ると路面劣化に悩まされる。左眼下に大西洋を望み、海風が向ってくる。オリャンは漁港と聞いたので鰯の塩焼きでも食べようと寄ってみたが、一大漁業基地で鰯を焼く匂いも煙もなかった。風はますます強くなってきた。ファロからラゴアまで列車、ポルトガルの駅も列車も一言もアナウンスしないので却って不気味だ。旧型車両とホームの高低差は８０ｃｍ~１ｍ、自転車の出し入れは他の乗客の手伝いを要する。

アジア系の若者数人、ペンションを教えてくれたが、分かりにくい場所で、レストランを兼業する主人に案内してもらった。帰りは早くも迷子になった。ペンション内の通路に自転車を置いた。主人はいきなり輪行袋を取り外して部屋に持ち込んできた。盗まれるかも知れないと。それなら高価な自転車を室内に入れるべきだ。こんな田舎町でも、と感じた。マイカーもトラックも猛スピード、救急車のサイレンもスペインより多い。どこか荒んで来た。ポルトガルも変わったか？

第９日目　５月 30 日ラゴスまで西進、そこから終着地まで北上。突き出しのこと　ラーゴスの旧奴隷市場を見学、いよいよ北上。まだ５時だが風はますます強く、オデセイシュ泊としよう。ぶらぶらしていたらチンマーはここだとばかりに、半ば強引に爺さんに連れ込まれた。かみさんに引き継ぎ、多弁だが要領を得ない、彼女は手のひらにボールペンで２６と書いた。吾輩は２０と書き直して決めた。外見は粗末だが、小奇麗な部屋。

レストランで鱈子を煮たような突き出し、ノン・オブリガード（ノー・サンキュウ）と言って下げてもらった。日本もこう在りたいものだ。頼みもしない突き出しが法外な値を取る。時々、要らないと文句をつけるが埒が明かない。

第 10 日目 5 月 31 日　コルク林　田園地帯、山林地帯を走り抜ける。この３日間甘い香り、ニッキのような芳香を放つユーカリが続く。耕作地はポルトガルよりスペインの方が圧倒的に美しく生産性も高いようだ。深く、複雑に入り組んだ地形が体力を消耗させる。何故かまた道を踏み違えた。道を聞くと、話が出来る人がいると数軒先の店に案内してくれた。しかし出て来た人は日本語も英語もできない。東洋人は皆同じように見えるらしい。食事をしながら地図を開くと、ここはサン・ルイスらしい。シネスを捨ててサンティアゴ・ド・カセムに出れば３４ｋｍ近道、結果オーライ。サドルに打ち跨ると大歓声。ウェストポーチの忘れ物だ。パリ・モンマルトルで置き忘れ、取りに戻ると「おめでとう」の大声援以来気をつけていたのだが。笑い話ですまず泣きの涙に暮れることもある。自戒の念を強くした。コルクの木が多くなってきた。３~４ｃ㎡程頂戴した。ポルトガルの街道沿いは人家疎らでバルもない。

第 11 日目 6 月　1 日　２６１号線は延々とコルク林が続く。広大な荒野に。さまざまな花が咲き乱れる。そのまま園芸種になりそうなものが多い。ポルトガルの勢力下にあった土地の多様性を反映しているのだと思った。砂嘴を走ってポンタ・ド・アドゥシェのフェリーポートからセトーバルへ、渡し賃３．２５ユーロ。「イエスの教会」を見学。吾輩の地図には橋がなく、航路らしい赤点線だけが表示されていたので、青函連絡船のような物を想像していたのだが、実際には鉄橋を渡ってリスボン入りとなった。ガイドブックにあるエコノミーホテル。看板が出ていないので分かりにくかった。６０€、エコノミーとは言えないが仕方無しと覚悟した。しかし個室は空いてない。ドミリー１８．２３€。巡礼の道、ポルトガル・ルートの始点なので、巡礼開始のスタンプを貰う。リスボンの街、ロッシオ広場などを少し散歩、流石に往時の繁栄の跡を感じさせる。

第 12 日目 6 月 2 日エントレカンポスと言う変な駅からトッレ・ヴェドラスまで輪行。早めに

駅にきてよかった。前客が切符を買うのに２５分かかった。吾輩も１５分かかった。この駅は２つの駅から構成されていて、出発駅のホームは２フロア上がって左に曲がって直進し、トンネルを潜ってホームの先端に行けと言う。再確認すると、そうだと言いながら職場を放り出して来て案内に及んだ。途中案内板は一切なかった。

トッレ・ヴェドゥラは期待してなかったが良い街だ。朝市が賑やかだった。街外れのバルで食事をしていたら心配していた雨、雨音激しく大粒。人家少なく、ここで雨宿りできたのは勿怪の幸いであった。

谷間の真珠と謂われるオビドスはおとぎの国、全くの観光地、城壁で囲まれた様子が一望できる。ジンジャと言うサクランボから作る酒をチョコレートの猪口で飲む。

ホテルを探し回って、サン・マルティニョ・ド・ポルトへ。巾着型のきれいな海、小さいが好ましい街、アズレージョを施した新しい住宅が数多く見られる。ホテルは２星、朝食つき３５€、朝食の品数、種類、内容は５星に匹敵、大儲けした気分。

アルコバッサ修道院

バターリャの修道院

第 13 日目 ６月 ３日（日） 枇杷を収穫、少し酸味があり、美味。今日は世界遺産２つ、アルコバッサの修道院、２０km 離れたバターリャの修道院、いずれも気宇壮大、厳粛にして華麗。

レイリアの旅行案内書で巡礼手帳にスタンプを要請、今日は日曜日で鍵がかけられた場所に保管されていて押せない、明日来てくれ、の一点張り。はるばる来た、明日はここには居ない、どうしても押してくれ、と粘る。最後はサインしてもらうことで手を打った。全く融通が利かない。

ポンパルで泊まることにした。３星、ツイン並みの広さ、４星以上の仕様、最高の朝食、タリフ６２€、４２€におまけ。但し、日曜日でレストラン探しに手間取った。

第 14 日目 ６月 ４日ポルト 護送 朝方は濃霧、駅への道を聞いてくる人が居た。教えると、オブリガード（ありがとう）、ナーダ（どういたしまして）とナーダを初めて使った。

コインブラ大学 図書館

コインブラに入ってからが大変、道がさっぱり分からない。大きな街ではないので激坂を歩く事に決めた。大学は一番の高台にあるので上るだ

け上れば何とかなるだろう。

メアリャダーを目指して北上、途中の分岐点で踏み間違えて東進、どうも様子がおかしいと思っていたらパトカーに止められた。高速に入ってしまった。吾輩の地図と現地は大分違っている。「自転車禁止の表示はなかった、間違ったことはしていない。」と一応の抵抗を示す。しかし昨年のイタリア警察のように罰金を取られてもつまらないので、今回は、「ポルトガルは美しい国だ、魅力的な街が沢山ある、食べ物が旨い、ワインが安くて旨い、東京に行ったことがあるか？」など他愛のない話をして３人で盛り上がった。２５分のドライヴで１号線まで送り届けてもらい、握手をして笑顔で別れた。メアリャダーで漸くレジデンスホテルを見つけた。朝食つき、バス・トイレつき、広くて立派な部屋、広いベランダ、２３€。

第 15 日目 6 月 5 日　朝から雨、ポルトまで列車。幅６ｍの自転車が自走できるホーム間の連絡通路。切符に印字された到着時間９：１９、時刻表９：３５。ポルトも坂の街、古い町、見所沢山、ポートワインは少し甘い。香りも良く極めて美味。大聖堂とサンベント駅など見学。

またもや雨、軟弱なれどヴィアニャ・ド・カステロまで列車、所要１時間３０分、眠り込んでしまい車掌に起こされた。ヴィアニャ・ド・カステロはこじんまりした素敵な街、細い路地には個性的な佇まいのレストラン、タリマ川の河岸の眺め、細工物が名物、刺繍を施したハート型の小箱、木材の手彫り、刺繍。ヴィーニョ・ヴェルデという若いワインは少し苦味と酸味があり、多少発泡している。赤と白がある。日本では少なくなったが、バルで亀の手を山盛り、懐かしい味覚、食べ方も日本と同じ。

第 16 日目 6 月 6 日。再びスペイン領に入り、トゥイを経てササンショ泊　スペイン西北部ガリシア地方一帯に布積みの石造家屋が分布する。塀や柵、畑の囲いにも石が豊富に使われている。中には日本の神社の柵のようなデザインもある。

またもや自動車道と明らかに分かる道に自然に入ってしまった。次のジャンクションで外に出た。心配していた空模様は小雨程度で済んだ。ポンテ・ウンドラワンの北岸を西行、夏のマリンリゾート地の様子、バブルの痕跡があちこちに残る。強風、時々雨。

第 17 日目 6 月 7 日巡礼終了証明書　夜来の雨、未明にはいよいよ激しく、

サティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂　栄光の門

巡礼終了証明書と巡礼手帳

風はヒューヒュー、ゴーゴーと唸り、土砂降り、暴風雨だ。バスも鉄道もないのでここに連泊か、などとうとうとしながら考えた。夜が明けると幸いなことに雨も風も止んでいた。ヴィラガルシアの海ノ中道の素晴らしさ、磯の香りに惹かれて漁港を３km ポタリング。あな珍しや、葱畑、葱坊主も出来ている。ヴィラガルシアは久し振りに活気溢れる街、なんとなく昔の三ケ日の雰囲気を感じる。ガリシア地方は雨が多く緑一杯、天気は刻々と変わる、黒雲が俄に天を覆ったかと思うと土砂降り、暫くすると晴れ、と思うと曇、目まぐるしく変わる。パドロン(無人駅)から列車に乗ろうとしたが、定刻を１５分過ぎても１人の客も集まらない。サンティアゴまで１７ｋｍ走ることにした。相変わらず忙しく変わる空模様、２度雨にあった。

いよいよサンティアゴ・デ・コンポステラ！世界遺産カテドラル、圧倒的な構造、中まで自転車を持ち込んで注意される。不謹慎極まりなし。巡礼事務所には大勢の巡礼、ポルトガルルートでは出会わなかったのに。７つの窓口、１時間待ちで巡礼終了証明書。ホテルはビルの６階に間借りのようなかたち、連泊、予約５，５５０円現地３５€、予約の方が高いのは初めての経験。またもや１０９号室。１０９なんて花札ではブタだ。縁起でもない！

ヘラクレスの塔

金泥細工の主祭壇

第 18 日目 6 月　8 日
ヘラクレスの塔　ポルトガル時間のままだった腕時計を直す。空輸時の自転車保護のためダンボールを get すべく、手順と言葉をホテルマンにメモして貰ってスーパーへ。無料では貰えず１．２７€で買わされた。ビストロ・バ

ルに入ってプルポ（蛸）を注文したら、プルポリエ（蛸料理専門店）を紹介された。２０ｃｍの皿に山盛り、カトラリーを頼んだら、スペインでは楊枝で食べるのだと言われた。生ハムより高価。今までで一番美味しいパン、どうしたらこんなに穴だらけのパンが焼けるのだろう？

ア・コルニャへ列車３０分、ここは凝ったファサードの建物が多い。晴れていても通行人は傘を携帯している。ヘラクレスの塔へはバス２０分。環境保全が素晴らしい。無料公開。帰りのバスで運転手に駅は未だかと聞いたらこの先だと言われた。再確認したら通り過ぎて後方だと言う。頭に来て釣銭台をいやっというほど叩いて怒鳴りつけたので、手が痛くなってしまった。駅の売店で数独を買った。いまや世界中の何処でも買えるのが嬉しい。

第 19 日目 6 月 9 日早朝便は朝起きる自信がない。マドリッド空港近くで前泊。イベリア航空の手荷物規則；131＊72＊21cm 超片道 75 ユーロ 20 ユーロで収納ケースのレンタルあり。ところが、サンティアゴ空港で自転車の持ち込み料を７５€取られた、癪に触る。搭乗口は航空券に印字されているのと電光表示板では違う番号、徹底的に分からない振りをして現場に連れて行かした。一人旅は気骨が折れるわい。

予約したホテルは野中の一軒家、超巨大ホテル、劇場、２４のボールルーム、吾輩の部屋は４０㎡、４つのエレベーターホール、館内バルの飲食物は通常の４倍。館内のビュッフェで侘しく夕食、ワイン飲み放題。スペイン最後の夜は街中のバルとかレストランで過ごしたかった。

第 20 日目 6 月 10 日マドリッドはやはり暑い。西方、サンティアゴ方面を望めば厚い黒雲。マドリッド 09：55 発、フランクフルト乗換え。

第 21 日目 6 月 11 日成田 07：55 着

走行距離

	５　　月	６　　月	計
ス　ペ　イ　ン	３８１ｋｍ	１１９ｋｍ	５００ｋｍ
ポ　ル　ト　ガ　ル	２７２ｋｍ	３８７ｋｍ	６９５ｋｍ
計	６５３ｋｍ	５０６ｋｍ	１，１５９ｋｍ

費　用：１４７，７９０円＋６８８．８６€

交通費：成田往復６，４６０円、航空運賃１１８，７８０円、海外１３０．４€(自転車７５･)

宿泊費：予約３泊２２，５５０円、１６泊６４６．５１€

朝食代：６食１８．７€

昼食代：１２食１０７．４５€

夕食代：１８食２８９．８€

雑　費：水、果物、野菜、入場料など９６€

休んでいると何人かが寄ってきて吾輩の自転車に興味を示し、曰く、どこから来た？何処まで幾日か走るのか？中には、「日本から海の上を走ってきたのか？」などと言う者もいる。吾

輩は「海の上では沈んでしまうから、海の底を走ってきた。」と言ってやる。

6 月のスペインでは夜 9 時は未だ太陽がギラギラしている、10 時でも明るい。最高気温は日本と違って 9 時半頃、朝早出したいが朝食が遅いので侭ならない。

レモン入り夏の赤ワイン：ワインと等量のレモンジュース、アルコール度数が薄くなるのでスピリッツを加える人も居る。ホットワイン、キール・カーディナル（赤ワイン＋カシス）に赤ワインレシピとして追加した。

酒精強化ワイン：未だ糖分が残っている発酵の途中にブランデーを加えて酵母の働きを止める。マディーラとポートワインがポルトガル、シェリーはスペイン。今でこそ英国でも葡萄が栽培できるが、往時は出来なかった、ポルトから輸入した。酵母の働きを止めているので品質に変化は生じない。

食事

朝食：朝食付きホテルでない時はスーパーや八百屋などで野菜や果物、ハム、チーズ、水を買う。１食３~５€。

昼食：ホテルの朝食の時ビニール袋に入れてくる。咎められる事はなく、堂々とやって差し支えない。朝食付きホテルでない時はバルやレストランで１食４~２５€。

印象に残った食べ物：スペインでは上等の生ハム（単にハモン jamon と言う、所謂ハムはローストハム)。ブタのミンチにトマトソースを混ぜ、チーズと共にパスタ生地に包んで焼いたもの。揚げたてのフライドポテト。向日葵の種。ポルトガルではマイワシの塩焼き（１尾頼んだら８尾出て来た！)。衣の薄い鱈のフライ。茹でた亀の手。衣の薄いカツレツ（ミラノより旨い)。

宿　ホテル、オスタル、ペンション、チンマーなど。満足度は料金に拘わらず。１５~４２€が多かった。２星３星でもバスタブ付がある。大都市は高い。

お土産：スーパーで菓子と向日葵の種、空港で菓子とパエリア鍋、ハート型の刺繍小箱、コルク製小銭入れとコースター、コルク樫の樹皮など。

道路：路面状況は両国ともフランスより良い。ポルトガルは時々ひどい悪路があって、脳が頭蓋骨の中で踊り、脳震盪を起こしそうなこともあった。ポルトガルでは行き交う車も少ないのにハイウェーを造ったり、ハイウェーに並行してハイウェー並みの道路を新設・拡幅などしていた。

交通マナー：ポルトガルでは右側一杯に寄って来る車が多いので危険を感じた。リスボンのドミトリーで同室だった女性バスツーリストもバスに乗っていてそう感じたと言っていた。

旅のスタイル：がんがん走るだけではなく、旅のスタイルを変える時期に来ているのかも知れない。列車多用、距離目標を持たない、先を急がない、ゆっくり見てまわる、最終帰国便に間に合えばよいと考える、late arriver にならない、など。　　以　上